

C—81 室町時代の遺品（第2報）
熊野速玉大社の御神服について

星美学園短大 栗原 澄子

1. 本報は、日本の風土にはぐくまれた生活環境のなかに生きつづけて来た被服の歴史を究明するために、今日残存する各時代の遺品をとりあげ、その材料・構成方法・着装方法その他を綿密に調査し、将来の被服史大成のための基礎研究である。

2. 既報の鎌倉時代の遺品（鎌倉鶴岡八幡宮の装束）に続いて、熊野速玉大社の神宝の中の保号（薄衣）・呂号（袴）と称する装束を対象として、前回第1報に次いで本報は色相・染料・各部の寸法・地の目・裁ち方・縫製に用いた糸の調査をする。

色相は鶴岡八幡宮の時と同様にして調べた。染料は遺品の一部（破損した粉末）から抽出した色素をペーパークロマトグラフ法によって天然染料と比べ、高田義男氏の「和染鑑」「和染鑿略解」を参考として使用染料の種類を判定した。寸法・地の目・縫製に用いた糸は遺品の実測である。裁ち方推定図は地の目から推し測り、山本らく教授の「平安時代の被服の裁ち方図」や、私の調査した八幡宮の装束の裁ち方推定図を参考にしてつくった。

3. 色相名は文献では同一であるがマンセル数値は3種とも異なっている。染料は3種とも同一と考えられる。形態は保号の袷が八幡宮の袷と異なる点は振りがあることであり、呂号の袴はネチ褌と呼ばれる種類のものである。縫製に用いた糸は八幡宮のものと同様に太いが、撚り数は非常に多くなっている。